

印刷

メール

この記事をストック

## (人生の贈りもの)村山富市(89):2



🔍 印刷会社時代の同僚と。前列左が本人

### ■元首相

### ■戦争体験が平和主義の原点

——大分県の漁村で生まれ、少年時代を過ごしました

父は漁師で、11人きょうだいの6番目。男が8人、女が3人だった。貧しい家庭で子どもの頃から網を引いていた。おとなしくて平凡な子だったな。尋常小学校6年生の時に中学校受験を目指すクラスに入った。模擬試験を受け、廊下に張り出された試験成績を見るとビリ。「これはいかん」と勉強すると、成績は上がった。高等小学校では、クラスで3番以下に下がったことがなかった。努力の意味を知り、生きていく上での自信につながった。

——高等小学校卒業後、14歳で上京します

同郷の友人と2人で上京し、五反田の小さな町工場で旋盤工の仕事をした。学校で勉強したいと思ったが、朝から深夜まで働く日々。**実家から東京の知人を紹**

介してもらい、その縁で築地の印刷会社に入り、住み込みで働いた。社長にお願いすると「若い時に勉強するのはいいことだ」と進学を認めてくれた。仕事を終えてから水天宮にあった東京市立商業学校に通って卒業した。

——明治大学に進学します

大学では哲学研究部に入った。のちに北海道池田町のワイン町長として知られる丸谷金保さんが先輩で「至軒寮」に入るように勧められ、入寮した。憲法学者の上杉慎吉さんが開設した寮で、東大の赤門前にあった。そこで、すごい人に出会った。寮長の穂積五一さんだ。寮には出入り客が多かったが、来るものは拒まず、去る者は追わず、分け隔てなく広い心で接した。その生き方に刺激を受け、世間を見る目が変わった。五一さんはアジアからの留学生の受け入れに力を尽くし、その後、アジア文化会館をつくられた。

——戦時中、徴兵されます

1944年8月、都城の機関銃中隊に入り、その後、幹部候補生の試験に合格し熊本教育隊に入った。敗色は濃かった。友人2人と外を歩いているとき、急襲してきた米軍機の機銃掃射を受けたことがある。死を覚悟して、3人が折り重なるよう地面に体をふせた。「仲間同士、死ぬときは一緒だ」。そんな気持ちだったが、幸い、みんな助かった。

あるとき米軍機からビラがまかれ、ポツダム宣言のことが書かれていた。戦争は終わるな、と思ったね、口にはできなかったけど。戦争体験はその後の反戦・平和主義の原点になった。

——46年、郷里に帰り、社会党に入ります

東京で就職することも考えたが、大分で漁村の解放運動をしている友人から手伝ってほしいと呼ばれ、漁村青年同盟に引き込まれた。主な活動は漁業協同組合を設立することだった。民主的な組織にせないかん、と意気込んだ。

活動をはじめてまもなく、大分県知事選があり、社会党の応援をしたことがきっかけで、入党することになった。労働組合の機関誌発行の手伝いや企業の労組活動の応援にまわった。低賃金で苦しむ労働者の声を聞いて、大衆運動や労働問題への関心が高まったんじゃ。(聞き手・大西元博)